

木村聖哉「戦時下の山本周五郎」への反論

——作家像追究の視点をめぐって——

木 村 久 邇 典

1

ことし（一九八九年）の三月に、木村聖哉が「戦時下の山本周五郎^①」という文章を発表している。筆者は雑誌記者で、昭和六十二年三月、東京リポポートの「民間日本学者シリーズ」の一卷（注・第六巻）として「添田唾蟬坊・知道」（二八八ページ）という評伝を刊行したさい、この反骨に富んだ父子の事跡を調べてゆく過程で、昭和五十五年三月に死去した知道の日記や書簡等を読み、戦前・戦中に知道と山本周五郎がきわめて親しく交際していたことを知った、という。

ところがある〈事件〉が両者の間に起こったため、二人はまったく疎遠になってしまったのだが、この〈事件〉が周五郎に大転機（傍点筆者）をもたらすことになった——と前置きして、筆を進めている。

木村聖哉がいうように、添田唾蟬坊（昭和十九年二月死去）は、「ラッパ節」「あゝ金の世」「ノンキ節」などの反権力的な世相諷刺の演歌師として知られ、息子の知道にも若い時分に「東京節」（バイノバイ）というヒット曲があ

り、昭和十八年には長編小説『教育者』で新潮社文芸賞、昭和三十八年度には『演歌の明治大正史』で毎日出版文化賞を受賞した『芸術？親子』であった。

山本周五郎が鎌倉の南腰越から、結婚早々の新居をたたんで、荏原郡馬込村（のち大森区東馬込と改称）へ転居したのは昭和六年一月十五日。新鮮な芸術的刺激をうるために、あたらしい文学仲間を欲していた山本が、『馬込文士村』ともいわれ、大勢の新進、中堅、大家等々の芸術家が蛸集（いしゅう）していた『馬込村』の住人で、知友でもあった今井達夫（故人・三田派の小説家）と松沢太平（広津和郎の義弟）との契機によったのであった。

添田知道が、滝野川区上中里町六二から大森区馬込の弁天池ちかくに移ってきたのは昭和九年ごろ。翌十年には馬込東四ノ二五一に転居して、馬込東三ノ八四三に住む山本周五郎との交際はいつそう深いものになった。知道三十三歳、周五郎三十二歳である。

木村聖哉は書いている。

〈彼ら（筆者注・馬込文士らのこと）が遊びでやっていた大森相撲協会の番付によると周五郎の四股名は平錦（のち馬錦）で、知道の四股名は蟬ヶ峰。いずれも前頭になっている（近藤富枝著『馬込文学地図』）〉

というのだが、（のち馬錦）とあるのは誤まりで、同協会が結成された昭和六年ごろ（つまり山本が馬込へ移住した時分）から、協会が戦争の拡大で自然消滅するまで、山本の相撲名は『平錦』だったのであり、『馬錦』は文士連がカゲでささやいていたニックネームにすぎなかった。山本自身は、馬錦という綽名（あだな）をひどく嫌っていた。土岐雄三あての書信に、山本はニックネームの名付親らしい尾崎士郎に対して、ダンコとして拒絶したと示した一文がある。だいたい大森相撲協会そのものが誕生するキッカケとなったのは、山本と親しい友人だった相撲評論家彦山光三（故人）の仲立ちによるものであり、馬込文士連の大相撲見物を実現させたのも、山本周五郎の労によるものだった、と彦山光三は回想している。

山本周五郎は新進時代から、原稿料前借魔として知られていた。また彼は、手紙書き魔でもあり、添田知道にあてた手紙も、七通が残っていて、現在、横浜の神奈川県立近代文学館に保存されている。

さらに、木村聖哉によると、

〔周五郎の手紙の文末はどれも、(傍点筆者)「周」のサインになっているが、知道に対する敬称は少しずつちがう。最初は「添田先生」である。はつきりと「目置いて」(傍点筆者)いる。次に「添田知道様」となり、やがて「吐蒙様」(吐蒙は知道の排号)、「添田知道字兄」へと変わっていく。この敬称の変わり具合で両者の親密度がよくわかるのである〕

木村聖哉はなにを根拠に、周五郎の手紙の文末はどれも「周」のサインになっているなどといいたのであろうか。

拙著『書簡にみる山本周五郎像』⁽²⁾から拾っただけでも、

昭和二十四年四月九日発、水田九八二郎(注・編集者)あての速達はがきの文末には、〔横浜市中区本牧元町 山本周五郎〕(二〇九ページ)Ⅱ(傍点筆者)

とあり、昭和三十二年三月三十日消印の大池唯雄(注・故人、小説家)あてのはがきの文末は〔周、五郎〕(傍点筆者)、また、昭和三十三年三月二十五日消印の大池唯雄あて封書書の文末にも〔周、五郎〕(二九六ページ)Ⅱ(傍点筆者)という署名がある。

さらに、木村聖哉に借問したいのは、山本が添田にあてた最初の手紙に「添田先生」とあり、〔はつきりと一目置いている〕としている点である。添田は山本より一歳年長である。馬込時代の山本は、今井達夫によると、年長者に對してはそれなりの礼儀をもって對した、とのことだから、添田にも他の年長者に接するのと同様に「一目置いた」

——というのであろうか。それが添田様から添田学兄へと変遷していったのは、木村聖哉のいうように両者の親密度がましていったしるしも解せようが、角度を変えて考えると、添田への敬意が減耗していった現われと言えなくもない。

昭和二十九年七月一日付、大池唯雄あて書簡の文末には〈大池唯雄先生〉(二七〇ページ)Ⅱ(傍点筆者)とあるのだが、大池は明治四十年十月生まれ、山本より四歳の年少であった。文面は、大池が山本を「先生」「大人」と呼んだことを戒めたもので、むしろ軽い揶揄(やゆ)を寓(ぐう)して「先生」と呼び返しているのである。

山本周五郎は、本来の意味で、他人に「先生」という尊称を用いることの稀(まれ)な、誇り高い文学者だった。昭和三年十月下旬、勤め先の「日本魂」社の編集者の職を逐(お)われたとき、以後は物を書いて自立しようと決意した山本は、十月二十四日の日記に「³」のように記している。

〈二十二日の昼間徳田秋声先生(今は先生と云わねばならぬ)を訪ね、原稿のこと、勤口のことなど、浅い馴染にも不拘頼んでみた〉(傍点筆者)と。つまり山本青年は、秋声の文学に対しても、さほど傾倒していなかったことが分かる。

添田に「先生」と書き送ったのは、一目置く、といった御大層なものではなく、もっと軽い意味で用いたもの、ちょっとした親愛の情の表現、と読むべきであろう。

2

ところで山本周五郎と添田家とは、山本の少年時代から浅からぬ因縁でつながれていた。

両家の関係について、木村聖哉は一行も触れていない。

山本周五郎（本名清水三十九^{とむ}）少年が、横浜市西区の西前小学校四年生に進級して間もなくの明治四十五年六月二日。横浜市久保町塩田五十番地の清水宅の隣りに新しく越してきた五人の家族があった。清水家は二戸建ての長屋に住んでいて、その隣りが空き家になっていたのである。

新しい隣人一家のあるじは添田辰五郎といい、北海道での開拓事業に失敗して、蝦夷地から船で引き揚げてきたのであった。横浜と樺太間の航路の貨物船の事務長をやっていた辰五郎の弟由太郎が、久保町とは目と鼻の先の戸部町にすんでいて、手回しよく塩田の家をみつめてくれていたのへ入居したのであった。

添田辰五郎には五児があり、長男貞吉、次男英次、その下に三人の娘がおり、いちばん下をアサといった。貞吉と英次はすでに成人していて、貞吉は東京・木挽町の「きねや」質店の二番番頭、英次は木挽町の質店とチェーン店である八丁堀の「きねや」に徒弟として住み込んでいた。

添田辰五郎には、由太郎のほかに平吉という弟がいた。平吉は俳号を凡人と称し、演歌師の添田唾蟬坊として知られていた。唾蟬坊の息子が知道であることは、すでに述べた。

山本周五郎は西前小学校を卒（お）えると、中学進学の希望も家庭の事情でかなえられず、添田貞吉のすすめで、木挽町の「きねや」質店の住み込みの徒弟となったのである。店主の洒落斎山本周五郎はすぐれた人格者で、店員たちに学問を奨励し、店員同士も、手書きの「創作」という誌名の文学同人誌をつくって回覧したりしていた。その一冊が山本周五郎の小学校時代の級友町野敬一郎（故人）宅に現存している。添田英次も同人の一員として加わった。

右の事情は、添田英次の談話および妹の鈴木アサが、わたくしにあてた書簡によって知ったのである。したがって、山本周五郎は小学校時分から、演歌師として全国に名高い唾蟬坊の存在を知っていたと、当然推量されるし、貞吉や英次から、彼らのいとこに知道という息子があることなども話し聞かされていた可能性が無いとはいえないのである。だから山本周五郎は、知道と相い遭うまえからかれに親近感を寄せていた……と断じても誤まりないと思われる。

添田知道が馬込住民となったのちの、山本との親交ぶりは、添田の『空襲下日記』⁽⁴⁾からも容易に推察することができる。

木村聖哉は、はたして、山本と添田両家の幼少時からの関係を、どれだけ承知もしくは追究して、この「戦時下の山本周五郎」をつづったのか、わたくしはあらためて首をかしげざるをえない。

木村聖哉は、敗戦直前の山本周五郎の生活状態をつぎのように記す。

〈当時（注・昭和二十年春）、周五郎には病気の妻と四人の子供がおり、長男は空襲で行方不明、次女は学童疎開中で、家にはきよ（十二歳）と次男徹（二歳）がいた。生活は貧窮のどん底（傍点筆者）にあり、周五郎の日々は沈鬱きまるものだった〉

この山本の身辺にかんする記述には、かなり筆の足りない箇所が目につく。

空襲下、行方不明になった長男の徹^{とち}は、都立園芸学校の生徒だった。長女のきよが在宅していたのは、高等女学校の入学試験を受けるべく、学童疎開先の伊東から帰京していたためである。そのころ、旧制中等学校へ進んだのは、すくなくとも中流家庭の子弟たちで、こんにちの新制高校と同列に論じるわけにはいかない。たとえわたくしは、昭和十一年に旧制の県立中学に入ったが、人口七千の、その田舎町の小学校から中学へ進学したのはわずか六人にすぎなかった。生活が貧窮のどん底にある家庭で、容易に出来ることではない。

山本周五郎がよく語った回想に、

「ぼくは結婚以来、家庭生活をしたことがない。家族の暮らす家と仕事場とを別々にして二軒を借り、たいてい女中も置いていた」

という話題があった。戦時末期の人手不足の時期になってからは、常時、使用人を雇うわけにもいかなかっただ

ろうが、昭和十五、六年ごろの正月は、日の丸を立てた家の門前で、山本を中心に晴れ着をきた家族が、一同で写真撮影するのが恒例になっており、お手伝いさんも一員として加わっているスナップが、山本周五郎文学アルバムにも収録されている。⁽⁶⁾ 山本の仕事場とした家は、もちろん写真も残っており、二軒の借家にかんする秋山實磯、岡田正富、添田知道らの記述がある。

ちなみに、戦時中の山本の、これまで判明している作品編数は、

昭和十四年三十七編（うち連載二）

昭和十五年三十二編（うち連載一）

昭和十六年十五編

昭和十七年二十編（うち連載一）

昭和十八年二十一編（うち連載一）

昭和十九年二十一編

昭和二十年十二編

であり、他に単行本十六冊を刊行している。

これを以ってしても、〈生活は貧窮のどん底〉にあった、というのであろうか。

かつて尾崎士郎が馬込時代を、わたくしにこう回顧したことがある。

「われわれ文士仲間は、たいていが貧乏だった。そのなかで、いちばんちゃんとした生活をしていたのは、山本周五郎だったよ」⁽⁶⁾

もちろん山本も決して裕福だったわけではない。いつも「ゲルヒン」の状態だったのも事実であった。しかしそれは、稿料が入れば「次のよりよい作品」を書くために、借し気もなく費消してしまうからで、世人のいう「貧窮」と

は次元が違っていたのである。そういう生活を〈貧窮のどん底〉というのには当たらないのだ。

山本自身も言ったものだ。

「なにしろ戦争も末期になると、ひどい物資不足で、バーも飲み屋もみんな休業。酒も極端に品不足。だから金が入っても使いたくない。あのときが、ぼくのいちばんリッチな時代だったなあ」

昭和二十年五月四日、きよい夫人が膀胱癌（すいぞうがん）で没したさい、山本が本棚（ほんだな）をほどこいて棺桶にしたのは、貧乏のためではなく、棺桶さえも、物資不足のため、市中では入手できなかったからである。炭屋のリヤカーを借りて、柩を桐ヶ谷の火葬場へ、山本と添田、秋山青磁と桜井某とで運んでいったのは、霊柩車も都合することのできないほど、戦勢がひっ迫していた故であって、〈貧窮のどん底〉にあったのが理由ではないことを、執筆業者も一応〈物資不足の折〉と云ってはいるけれども、あらためて断言しておく。

きよい夫人に亡くなられた山本は、二歳の乳飲児（ちゅうご）の微をかかえ、仕事もせねばならず、隣組の防空班長も引きうけさせられてもいたので、進退きわまつてしまう。周五郎ならずとも、同情にたえないところである。

木村聖哉は書く――。

へしばらく経って周五郎が「微をどこかへ預けたいが……」と知道に相談に来る。知道は早速、信州上伊那にいる親友（傍点筆者）の栗原光三宛に手紙をしたためた。知道と栗原はともに少年時代、社会主義者・堺利彦が主宰する売文社の給仕兼玄關番をしていた仲。その当時、栗原は新しい細君（松江）と二人で上伊那へ疎開中だったのである。以下、大略をしるすと、周五郎とも相識だった栗原が気の毒がり、子供は預かってもいい、なんならもらってもよい、と返事してきたので、六月十九日、周五郎は微を背負い、満員列車で信州に向う。知道も同行した。

だがこの措置は三者三様の思惑がちいで失敗に帰した。間もなく泣き言を訴える栗原の手紙が、矢継ぎ早に知道を襲って悩ますようになるからだ。

「七月十一日付の手紙は「エライ子供を預かったよ」「笑いを忘れ、遊ぶことを忘れ、食うことだけ」と徹の可愛
 気のなさを愚痴り、「山本君は教育者じゃない、一介のヘボ文士にすぎない」と周五郎をこき下している」

添田と山本に、連名であてた七月十五日付の栗原の長文の書簡には、徹が「終日、泣き顔をしている」「お粥を十
 三杯も食った」「自分は悲鳴をあげている」「山本君は子供を僕という他人に預けてのんびり仕事をしているが、僕や
 松江は何という物好きか」「養育費はいらないと思ったが、経済的にも大変」「山本君が再婚するか、文学を棄てて子
 供のために生活するか、徹君のため最善の方法を講じてほしい」という文字が連ねられてあった。

「狷介で人一倍気位の高い周五郎が憤激したことはいうまでもない。血相を変えて知道宅へ来るや、子供は引き取
 り、再婚する、金は少しだが送る、と声を高ぶらせた。知道が「感情的になるな」と言っても無理だった」という。

徹が馬込へ引き取られたのは、敗戦五日まえの八月十日のこと。八月九日付、知道あての栗原の手紙には「子供を
 帰し、やれやれと思っている」「山本を罵倒したのは子供に対しての小生の涙であった。山本はそれがわからぬ」と
 あった、と木村聖哉は書いている。

ちなみに執筆者は、この時分の山本周五郎の文壇での位置を、

「昭和十八年、『日本婦道記』が直木賞に推されたが周五郎をはもっと新しい人にやったらいいと辞退、とはいえ
 まださほど有名ではなかった（傍点筆者）」

としている。

はたしてそうだろうか。わたくしは疑問とせざるを得ない。芥川賞は無名の有望新人に、直木賞は文壇で、すでに
 あるていどの地歩をえている作者を対象として授賞した文学賞である。文学に関心をもつてのひとびとには、イロ
 ハのイに属する、初歩的な常識であろう。

山本の直木賞辞退について、永井龍男（小説家）の回想がある。

「苦節十年というが、山本周五郎は大正末期からの投書家時代を経て、当時すでに中堅作家の列に加わっていた。『辞退のこと』(注・山本が書いた辞退の井の表題)には、今更私が直木賞でもありませんという含羞と気魄が感じられる」(『回想の芥川・直木賞』)。

贅言(ぜいげん)をついやすまでもなく、永井龍男は、もと文藝春秋社の社員であり、初期の芥川・直木賞選考事情についても、もっとも詳しい当事者のひとりである。

木村聖哉の、〈さほど有名ではなかった〉とする山本の当時の文壇での位置づけと、いずれが信憑性(しんぴょうせい)にまさるであろうか。このような発言を行うばあい、もっと基礎的な文学史的素養の必要が痛感されるのである。

木村聖哉が、添田父子についてある程度の知識をもち、研究をおこなったことは想像できるにしても、山本周五郎について、どの程度の確実な資料にあたって、『戦時下の山本周五郎』なる文章をものにしたのか、たんに添田側から得た資料に依拠し、あとは短絡的幻想によって、独断にみちた結論をあみだしていったように思われてならない。先を読み進むと、その思いはますます濃いのである。

3

執筆者はいう。

栗原光三に誇りを傷つけられた周五郎は、猛然と発奮、一念発起、背水の陣を敷く。筋向かいにすむ三十八歳の独身女性吉村きんと再婚し、昭和二十一年一月、横浜へ移転し文学に精励する。

木村聖哉の筆は、ここで一段と調子をたかめる。

へすでに記したがごとく(山本の境遇は)、実際はそんな生やさしいものではなかったはずである。周五郎はギリ

ギリ追いつめられ、だれかとすぐにでも再婚し、生活を立て直さねばならない状況にあったのだ。で、たまたま(傍点筆者)すぐそばに銀行勤めの三十八歳の独身女性がいたので、周五郎は強引に話を持っていったのである。

これが事の真相だったと私は思う。(傍点筆者)。おそらくきん夫人は、周五郎と知道の交遊や栗原の手紙の一件などは何もご存知なかったのではないかと。そういう「屈辱的」な話は胸中深く秘め、周五郎はだれにもしゃべっていないのではあるまいか。

そして木村聖哉は、つぎのような驚嘆に値する創見に富んだ結論をみちびきます。

二人の再婚のきっかけになったのが栗原光三の手紙だったこと、栗原に罵倒されたことが周五郎を発奮させ傑作をうむ原動力になったことを考えると、栗原は「作家」周五郎にとってすぐれた「反面教師」だった、と言えなくもない。

というのである。風が吹けば桶屋がもうかる式論法の典型例であろう。

徹を里子に出した前後の事情は、おおむね木村聖哉の述べるごとくであつたかもしれない。

だが、山本周五郎がわたくしに語った事の成り行きは、まったく別である。

山本は栗原を、人間の皮をかぶつただけの、動物よりもっと下劣なヤツ、と評した。

「だいたい、二歳の徹が十三杯も粥(かゆ)を食った、と手紙に書いてよこしたよしだが、いかに小さな子供用の茶碗(ちやわん)によそつたにしても、このような大食いは、人間の常識で考えられることであろうか。事実とすればまさにギネスブック的記録ではあるまいか。栗原の当時の生活は、木村聖哉も「苦しかった」と書いているのだが、山本に提示(あるいは要求か)した養育費は、世間では考えられないほどの高額であつたという。

わたくしは昭和四十三年に講談社から上梓(じょうし)した拙著「人間 山本周五郎」のなかで、山本が徹にあうために、栗原宅へ赴いたときのことを、こう誌している。

「親が来たのにおびえたような様子をみせるし、栄養失調からの吹出物で全身がただれている。すぐ東京にひきつたが、昼夜ヒイヒイ悲鳴のような声をあげて泣き通してあった」

「いかに残酷無惨な扱いを、徹が栗原から受けていたか、それだけでも分かるじゃないか」と山本は言った。

「それにな」と山本は続けた。「栗原の野郎は、徹のことを、このガキと言いやがった。おれの粹（せがれ）をガキだと……」

山本はそのとき、感情が激してきたものか腹立たしそうに涙を流し、男なきに泣いたのである。横浜・間門町の海に面した丘の上の、旅館間門園の奥のつき当たりの六番の間（山本は昭和二十三年春から二十九年秋まで、その部屋を仕事場としていた）でのことである。

木村聖哉の（周五郎はだれにもしゃべっていないのではあるまいか）という「幻想」はどこからわいてきたものであろうか。もちろん、きん夫人も、この件については、重々承知していたのであって、軽率な空想はきびしく戒めねばならぬと思うのだ。その意味で、木村聖哉はわたくしにとって、よき「反面教師」と言えないこともなさそうである。

さらに木村聖哉の空想力のゆたかさは、きよい夫人をうしなうて追いつめられた周五郎が、生活を立てなおすべく〈だれかとすぐにでも再婚〉せざるをえなかったので、〈たまたますぐそば〉の独身女性と結婚したのであって、これが事の真相だったと私は思うと論ずることで、証明される。

《私》がどう《思》おうと勝手だが、ここまで独り決められてしまうと、山本の身辺について、いくぶんか木村聖哉よりは詳しいらしいわたくしも、あえて山本ときん夫人のために一言のべさせてもらいたくなる。

きよい前夫人が死去されたあと、山本には後妻の候補者が三人いた。

一人は山本の行きつけだった銀座のバー「ルパン」の一階の雇われマダムで、のちに独立して「まあま」の経営者

になった平野千代（故人）。この件については、彼女の談話が新聞や週刊誌に載ったことがある（詳しくは「まあま」の現ママのよし子Ⅱ千代の長女Ⅱに聞いてもらいなさい）。

二人めは、山本と非常に親しかった編集者（故人）の妹である。こんにちも健在なのでここでは姓名は明らかにしないのが礼儀というものであろう。

そして三人めがきん夫人であった。きん夫人が馬込へ越してきたのは昭和三年のことで、八重子という妹がおり、近所でも評判の美人姉妹であった。きよ前夫人の病いが篤くなると、吉村（きん夫人の実家）では自家の大きな防空壕へ病人を蒲団（ふとん）ごと退避させたり、幼児や食事のめんどろもみてやりたりしたという。

山本の直話では、前夫人は、私が死んだあとは、家のことはきんさんに——と言いつ残したそうである。

妹の八重子は、きん夫人とは別の銀行につとめていて、同じ銀行の行員村田千束と、姉よりも早く結婚した。見そめられての恋愛結婚であった。

昭和三十七年二月の寒いころ、山本家と村田家が、相模湖に鴨（かも）料理を食べに行ったことがある。わたくしも同伴した。山本周五郎というひとは、木村聖哉のいうように頑固で身勝手で自分本位だったばかりでなく、ときどきは家庭サーブスにも細かく心をくばる優しさを持っていた。

相模湖の帰路、山本がとつぜん言いだして、横浜・吉野町の「徳太楼」という、山本がひいきにしていたすし屋の二階へあがった。

昼から飲んでいた山本は、かなりご機嫌で、村田夫婦をならべて上座にすわらせると、

「ヨウ、イイゾイイゾ、ご両人ノ」

とひやかすように囁（はや）したものだ。すると、八重子夫人がうすく頬をあからめ、いつもの明るい口調で、山本を半分にらむようにしてやり返した。

「あら、兄さんたちだってそうだったくせに——」

これはその場に居合わせたわたくしだから言うのである。山本周五郎はきん夫人を以前から心にくからず思っていたのはあるまいか。けっして独りよがりの空想的判断ではない。そして村田夫婦はいまも健在であることを付け加えておく。

したがって、山本は、たまたま身近かにいた、誰でもいい女性と結婚したのではなく、きん夫人が再婚相手でなければならなかったのである。幻想だけで、無責任な揣摩憶測（しまおくそく）をつづるべきではない。

また木村聖哉は、〈どんなに親しくしていた人が亡くなっても、周五郎は「時間の浪費だ」と葬式へは行かなかった〉とも書いている。これも事実に反する記述である。

昭和三十四年十一月二十九日、博文館の大橋進一社長が亡くなったとき、山本は二重マントを羽織って上京し、大橋の柩を電信柱のかげから見送った（高森栄次博友社社長の話）ということだし、葬式へ行くのは「時間の浪費」などといったのを、わたくしはただの一度も聞いたことがない。物書きとしては、読者によりよい小説を提供するために仕事に全力を打ち込むのが、私の菩提（ぼだい）をとむらう最善の供養だ。だからわたくしはカミさんをやって、自分は机に向うことにしている、というのである。物書きはかくもありがたいものだと思う。

さいごにもうひとつ。

戦後、フラッと知道宅をたずねてきた周五郎は、知道に戦中、世話になった礼返しのつもりか、座布団の下にこっそりサイフを置いて帰ろうとしたのを知道がつっ返すと、周五郎は「おれはサイフは持ってこなかった」ととぼけたという話を、高木護（詩人）からの又聞（またき）きとして紹介している。これは高木の、添田からのおそらく誤聞であろう。なぜなら山本周五郎は、生涯を通じて、サイフというものを所持しなかったからである。拙稿「バイブルの効用」⑨（「オール読物」昭和六十三年七月臨増号）を読んでもいただければ幸いである。

ちなみに、わたくしは昭和四十八年三月、実業日本之社から『山本周五郎アルバム』を公刊したさい、添田知道に、二度、電話をして教示を仰いだことがある。

わたくしの質問に、添田はまことに好意的かつ懇切ていねいに答えてくれたものであった。添田の口吻（こうふん）には、かれの人柄のあたたかさや、山本周五郎に対する懐旧の情がにじんでいるように、わたくしには聞えた。まして山本への悪意など微塵（みじん）もかんじられなかったことを、とくにつけ加えておきたい。

思うに木村聖哉は、添田日記や書簡、および栗原書簡を主要な資料とし、あとは彼独自の短絡的幻想によって本論を展開したのではなかったか。すくなくとも、添田についての知識に比較すると、山本に関する情報の収集においては、格段に貧弱であって、しかもその程度の材料をもとに、山本周五郎という並はずれて個性の強烈だった文学者の人間像を（たとえ、とくに「末期の「戦時下」」という一時期に限定しているとはいえ）、ひろく市販されている出版物に発表しているのである。その度胸のよさに敬服するとともに、わたくしとしては、このような文章の公表にさいしては、山本サイドの資料も精読のうえ、たんに創造的ドグマによるだけでなく、最大多数の読者を、十分に納得せしめうる論考を期待したかった、と惜しまれてならない。わたくしがあえて反論を呈したのも如上の意図によるものである。

《注》

- (1) 「新潮45」(一九八九年三月号) 所載。
- (2) 「書簡にみる山本周五郎像」(未来社、一九八七年四月一五日刊)
- (3) 「青べか日記」(山本周五郎著、新潮文庫、昭和六〇年四月二五日刊) 二〇六ページ。
- (4) 「添田唾蟬坊添田知道著作集第三巻」(空襲下日記) 添田知道著(刀水書房、一九八四年八月刊)

(5) 『新潮日本文学アルバム 山本周五郎』(新潮社、一九八四年七月一五日記) 四八ページ。

(6) 『山本曲軒』(『山本周五郎全集第四巻「縦ノ木は残った」月報、講談社、一九六三年八月二〇日記)』

(7) 『回想の芥川・直木賞』(文藝春秋、一九七九年六月三〇日記) 一一〇—一一三ページ。

(8) 『人間 山本周五郎——その小説的生涯』(講談社、一九六八年五月二四日記)。

(9) 『バイブルの効用』の全文はつぎの通りである。

〈父はすっかり古びた印伝革の大きな財布を持っていた。それは幅五寸、長さが二尺ちかくもあり、それを幾つかに折りたたんで、ふところに入れていた。それは紐で首から吊ってあるのだが、母に金を請求されると、まずひどく渋い顔つきで母を見、片方の手でふところを押える。財布を守ろうとする無意識な動作らしい〉(「語る事なし」)。

みぎは山本周五郎の随筆の一節である。山本少年にはそれが父の母に対するイジメのように見え、さらに恨みは「財布」そのものにまで増幅されていったようである。

山本は日ごろはほとんど和服で過ごした。財布を持たないため、したがって紙幣やバラ銭は、袂に無造作につっこんで外出する。支払いの時は、荒っぽい手つきで取り出して渡す、といったふうであったので、袂からお金がこぼれ落ちて気づかず、次の支払いの折りに泡をくうことが珍しくなかった。

そのような困惑をくり返すうちに考えついた紛失防止法も、いかにも曲軒流であった。それは必要な金額だけを袂に入れて出掛けることである。だからといって、いつも鍵をかけずに他出する仕事場の机に、現金を放りっぱなしにして来るわけにも行かない。

そしてやがて先生は、グッドアイデアを発見したのであった。昭和三十四年のことだ。

「そうだ、硬貨は空茶筒に入れ、紙幣は『聖書』の中にはさんでおこう。いかに手だれの泥棒君でも、『聖書』にまで気がつくまい。どうだい、名案とは思わないかね」

とんだバイブルの「効用」である。以後「聖書」は、山本周五郎の貴重な「紙入れ」になった。